

《研究ノート》

銅直勇教授の社会学 (2)

——高田保馬博士との社会・社会現象の本質に関する論争を中心に——

高 島 秀 樹

目 次

はじめに

1. 銅直勇教授の経歴と業績

(1) 銅直勇教授の経歴

(2) 銅直勇教授の業績

2. 銅直勇教授の社会学

(1) 社会学の概念

(2) 社会現象とは何か

(3) 社会学の方法

——一般的とはどのようなことか——

(4) 社会学の構造

(5) 純正社会学の諸問題

(6) 銅直勇教授の社会学の位置づけ

——米田博士の社会学との関係を中心に—— [以上前稿]

3. 高田保馬博士との社会・社会現象の本質に関する論争 [本稿]

(1) 論争の経過

(2) 高田保馬博士の社会・社会現象の本質に関する学説

——『社会学原理』から——

(3) 銅直勇教授の問題提起

——「新著紹介 社会学原理 高田保馬著」から——

(4) 高田保馬博士の再説

——『社会関係の研究』から——

1) 『社会関係の研究』第2章の構成と基本的視点

2) 社会の本質としての「望まれたる共同生存」

3) 銅直勇教授の問題提起に対する自説の提示

(5) 銅直勇教授の社会・社会現象の本質に関する学説

1) 「社会の概念」論文における社会・社会現象の概念

2) 『純正社会学概論』における社会・社会現象の概念

3) 銅直勇教授の社会と社会の本質に関する学説

4. 「社会」概念の考察

[以下次稿＝詳細項目略]

おわりに

3. 高田保馬博士との社会・社会現象の本質に関する論争

(1) 論争の経過

銅直勇教授の社会学について明らかにすることを目的とする本論考の第2回にあたる本稿では、高田保馬（1883～1972）博士との社会・社会現象の本質に関する論争について考察し、それを通して銅直教授の社会・社会現象の概念とその本質についての考え方を明らかにすることを目的とする。この論争に関して検討の素材とするのは、高田保馬『社會學原理』（1919年2月、岩波書店刊）、それに対する書評である銅直勇「新著紹介 社會學原理 高田保馬著」（『哲學研究』第69号、1921年12月、京都哲學會刊、所収）、さらにそれに対する高田博士の回答である『社會關係の研究』（1926年11月、岩波書店刊）特に「第二章 社會の本質に關して—銅直學士に答ふ—」である。また、銅直教授の社会・社会現象の概念とその本質についての考え方を考察するために、銅直勇「社會の概念」（『哲學研究』第80号、1922年11月、京都哲學會刊、所収）、銅直勇『純正社會學概論』（1929年3月、玉川學園出版部刊）を検討の素材とする。

銅直教授と高田博士との社会・社会現象の本質をめぐる論争の出発点は、高田博士が1919年2月に『社會學原理』を刊行したことにある。高田博士の『社會學原理』は、高田博士にとって社会学領域における代表的著書であり、今日においても日本社会学史上に銘記される社会学理論研究の一代表的成果である。『社會學原理』は、「若くして大著『社会学原理』を著わして、

心理学的社会学の樹立をめざし、ジンメルやテンニエス、ギディングズやマッキーヴァーなど
の見解をとり入れ、さらに独創を加えて、特殊科学としての社会学理論を展開させていった。」⁽¹⁾、「若くして大著『社会学原理』（1919）を著し、そこにおいてすでにギディングズやジンメルの影響のもとに、綜合社会学の立場を批判し、特殊科学としての社会学の立場を示した。」⁽²⁾、「社会の本質とは『有情者の結合』『望まれたる共存』であるとして、『特殊社会科学としての社会学』『社会科学界の一平民としての社会学』という形式社会学の観点に立脚しつつ、ひとつの法則科学として理論社会学を構築しようとした1385頁からなる浩瀚かつ独創的な作品である。」⁽³⁾など、今も高く評価されている。この著書をも含めた高田博士の業績の全体像については、「彼の分析はきわめて精緻であり、その体系は論理的に整備されている。その創意を鋭い頭脳によって鍛えあげた高田社会学は、フィールカントの学説を修正させ、マッキーヴァーをして賛同させたほどの世界的地位を占めるものである。…(略)…彼の社会学が日本社会学の水準を著しく高めた…(略)…」⁽⁴⁾、「緻密な理論構成によって日本の理論社会学を代表し、その水準を高めた。」⁽⁵⁾など、その独創性、科学としての社会学の樹立などの点で日本の社会学理論の水準を高めることに大きく寄与したと高く評価されているが、このような高い評価は基本的に『社會學原理』に対しても共通するものと考えられる。

高田博士が1922年に刊行した『社會學概論』の「はしがき」によれば、この『社會學原理』に対して、「…(略)…社會學原理の方法論的思想に關し懇篤なる教示と批評とを吝まれなかつ

た諸先輩、同學の方々特に鈴木宗忠博士（表現大正十一年二月號）銅直勇學士（哲學研究大正十年十二月號）木村龜二學士（大正九年十二月私信）山口正太郎學士（國民經濟雜誌大正八年四月號^(ママ)等の諸氏に對する答辯の一部となし、又^(ママ)た感謝の表現とする。」⁽⁶⁾と多くの書評が寄せられたことが記されている。ここに示された通り、高田博士が1919年に刊行した『社會學原理』に対して、銅直教授は1921年に書評である「新著紹介 社會學原理 高田保馬著」を『哲學研究』第69号、誌上に発表し、「…（略）…社會學は社會即ち有情者の結合を對象とする科學である…（略）…」、「…（略）…社會の本質を以て望まれたる共存なりと斷じ…（略）…」と高田博士の學説をとらえた上で、「尚著者は反對、争闘、分離は結合に非ず、故にこれを含む相互作用説は採るべからずと説かれるが…（略）…これを社會學の對象とするほうが『便宜上』に於ても適當なりと見られないであらうか。」⁽⁷⁾との問題提起をした。

この銅直教授の書評に対して、高田博士は1926年11月に刊行した『社會關係の研究』の中で「第二章 社會の本質に關して—銅直學士に答ふ—」という1章を設けて検討を加え、自説を再説、展開させている。高田博士は、銅直教授の指摘を要約して示した上で、「私は此二項に就き順次私見を述べることによりて共存説を辯護したいと思ふ。…（略）…銅直學士の批評に對しては共存説の立場を守りつつ答辯を記したい。」⁽⁸⁾として、1章、8節、27頁を費やして銅直教授の指摘に答えているのである。

これに対して、さらに銅直教授が直接対応する文章を発表したことは、残念ながら現時点では著者の知る限りでは明らかではない。しかし、銅直教授が書評である「新著紹介 社會學原理 高田保馬著」（1921年）を発表し、それに答えて高田博士が『社會關係の研究』（1926年）

を刊行する間、1922年には銅直教授は「社會の概念」論文を発表している。さらに、銅直教授は高田博士が『社會關係の研究』を刊行した3年後、1929年に『純正社會學概論』を刊行し、その中で2章にわたって「社會の本質」を説明している。これらは銅直教授が高田博士の主張に直接対応させて自説を展開させたものではないが、銅直教授自身の社会・社会現象の本質についての考え方を理解する素材となる。

以上、銅直教授と高田博士の間で展開された論争の経過について明らかにしたが、以下においてその各々の内容を検討していくことにしたい。

（2）高田保馬博士の社会・社会現象の本質に関する学説

—『社會學原理』から—

高田博士が1919年に刊行した『社會學原理』は、「社會學は其成立以來日尚淺くして未だ著しき發達を遂ぐるに至らず。異説紛糾して遂に歸一する所無き状態にあり。^(ママ)かるが故に、斯學の學徒にとりて先づ必要なる事は自ら把持する所の根本思想を定め、之によりて自家の社會學系統を確立するにあり。」⁽⁹⁾という社会学理論の研究をめぐる現状認識と、そのような状況に対応して自説を提示しようとする問題意識をもって著わされたものであり、次のような構成（以下では篇・章のみを示した、原著はさらに節、部分的に款・目に区分されている）を持つ、1385頁に及ぶ大著である。

第一篇 社會學……第一章 社會學の概念
／第二章 社會學の問題／第三章
社會本質論／第四章 社會の構成原理

第二篇 社會成立論…第一章 總論／第二章
同質結合論／第三章 異質結合

論／第四章 社會意識論

第三篇 社會形態論…第一章 總論／第二章

抽象的形態／第三章 具體的形

態／第四章 直接社會／第五章

直接間接社會／第六章 間接直接

社會／第七章 間接社會／第八章

社會圈及び社會關係／第九章

社會形態の静的相互關係／第十章

社會形態間の動的相互關係－變

動的の傾向／第十一章 動的相互關

係の説明

第四篇 社會結果論…第一章 總論／第二章

文化の發達／第三章 自由の發

達／第四章 個性の發達／第五章

結論

ここではその全貌にふれることは避け、以下の考察の中心となる「第一篇 社會學 第三章 社會本質論」のみを取りあげる。この「第三章 社會本質論」は、さらに「第一節 共存説／第二節 社會状態に着眼する異説／第三節 結社の心的因子に着眼する異説／第四節 社會現象に着眼する異説」の4節に分かれているが、その中でも特に高田博士自身の社会の本質についての考え方が説明されている「第一節 共存説」、さらにその中でも「二五 社會即望まれたる共存」を中心としてその内容を見るならば、次のように把握できる。

高田博士は第三章 第一節、「二五 社會即望まれたる共存」の冒頭において「社會とは何ぞや。」⁽¹⁰⁾との問いを自ら設定し、これに対して「有情者の結合」とする説明は、1. 同義語の反復にすぎない、2. 個人間の関係のみを抽象するものであって、「社會體」(＝集團の意味と解される)を意味することができない、という理由から不適当であると否定した上で、「…(略)…社會の本質は望まれたる共存に存す。」⁽¹¹⁾

との自らの考え方を示し、その考え方についてさらに次のように説明を加えている。

第1に説明されるのは、多数の個人が集まっても、それらの人々の間に何らの交渉もなければ社会は成立せず、もし相互の間に頻繁な心的相互作用があっても、共同生存の欲求によってそれが求められるのでなければ、なお社会は存在しているとはいえないということである。この考え方によれば、社会は反対や争闘とは明確に区別されるとしている⁽¹²⁾。

この説明を受けて第2に説明されるのは、反対と結合は異なった概念であるにもかかわらず、社会の本質を相互作用とする考え方では反対を社会の一部分とすることから、結合との混同を生じやすいということである。そして、社会の本質を望まれたる共存ととらえる高田博士自身の考え方によれば、このような混同を避けることができるとしている⁽¹³⁾。

第3に説明されるのは、社会の本質を望まれたる共存とする考え方においても、征服国家を例とするような一方的結合の社会も除外しないということである。被征服者が征服者に対して何らの愛着を感じていないということはあるが、征服者が自己の利益のために共存を求めて、搾取、支配の関係によって一社会をなしている以上、これも一方的に望まれた「共存」ととらえられる。この場合、共存の欲求と共存の拒絶との反対する二傾向があるが、「共存」の欲求が打ち勝っている場合に「共存」が存在し、それ故に社会の存在が認められるのであって、この点において自らの社会の本質についての考え方と矛盾しないと説明されている⁽¹⁴⁾。

第4に説明されるのは、この考え方は、交通、協働、交驩(＝交歓の意味と解される)、相互作用のような活動から離れていても、社会の存在を認めることができるということである。この点について、仮に社会の本質を協働や相互作

用に求める考え方に立てば、結合関係にある人々の間においても協働や相互作用が絶える場合があるが、その場合には社会の存在が認められないことになってしまい、こうした例を想定してみるとこの考え方は社会の本質を示すものとして不適当であるとする。その上で、高田博士自身の考え方が、個人間の活動を離れて社会の存在を認めることができるという点で、より適切なものであると説明している。同様に、社会の本質を心的相互作用に求める考え方では、心的相互作用が中断する場合には社会が存在しないことになり、この点からこの考え方も不適当であるとしている⁽¹⁵⁾。

この「二五 社会即望まれたる共存」に高田博士の社会の本質についての考え方の中心となる点は示されていると理解されるが、さらに「二六 社会の心理的反映—対人価値の意識」では、社会の本質は状態であって過程ではないこと、もし過程であれば社会は生滅がきわめて頻繁になってしまうが、現実には不断に存続することからも過程ととらえる考え方は不適当と考えられることが説明されている。また、社会の本質である望まれたる共存は状態であるとともに関係でもあるが、この関係の内容を明らかにするにはこの社会的事実が個人意識の上に反映していることを見れば良く、それは対人価値の意識としてとらえられることが説明されている⁽¹⁶⁾。「二七 利益による欲望の連帯」では、社会の本質は望まれたる共存であるが、これに随伴する現象として利益の連帯、または欲望の連帯ということがあり、これが協働と関連するが、この協働による欲望連帯は協働に先立つ社会（心理的反映として「愛着」を有する）の所産であると同時に、協働に後れた社会（心理的反映として「利視」を有する）とは同一事象の二面をなすものであることが説明されている。また、社会連帯は社会結合と密接な関連を持つ

が、両者は異なった概念であること、社会連帯は社会の随伴現象であることが説明されている⁽¹⁷⁾。「二八 共存説と種々なる異説」では、社会の本質を「望まれたる共存」とすると、社会の概念は「共存の欲求」と「共存」の二要素からなること、その中でも共存という要素を重視すること、それゆえ自説を「共存説」、または「共生説」(Symbiosis Theory)と名づけるが、この説に十分学理的価値を付与するためには種々の異説を検討し、論駁しなければならないとして、第二節以下で検討すべき点を予告的に説明している⁽¹⁸⁾。

このように、その要点をとらえることができた高田博士の社会・社会の本質についての考え方に對して、銅直教授がどのような問題提起をしたかを明らかにすることが次の課題となる。

(3) 銅直勇教授の問題提起

—「新著紹介 社会学原理 高田保馬著」から—

銅直教授は書評の冒頭において、「社会学原理一卷總頁數一千三百八十五。其量に於て其質に於て洵に社会学界稀に見る一大著作である。著者研鑽十年汎く先進諸家の學説を涉獵讀破して克く自家一新體系を樹立し、之を述ぶるに四閱年の長き苦心を費したものである。著者の蘊蓄を披くや苟も説いて餘さざらんとし縦横に諸説を提げ來って一々検討の斧を揮ひ、其の採るべきをとり其の破すべきを破し以て自家の立言を擁立する所洵に洋洋として大海の濤うつ如く吾人の着眼を啓き歸局を教示し裨益する所甚だ大なるものがある。吾人は先づ著者の研鑽努力と其の學界に對する貢獻とに對し多大の敬意を表し併せて左に本書の内容の大要及之に對する所感の一二を述べて感謝の辭に代へたいと思ふ。」⁽¹⁹⁾と高田博士の業績、『社会学原理』を高く評価している。

その上で、高田博士の社会の本質の理解について「…（略）…社會學は社會即ち有情者の結合を對象とする科學であるとし…（略）…社會即社會現象と見るの^{（7）}見を駁して社會は廣義に於ける社會現象の一でありそは經濟道德宗教等の諸現象と齊しく同一なる歴史的社會的實在的の種々なる方面の一であると斷じて居る。」⁽²⁰⁾、「…（略）…新しき社會學はたゞ社會現象の一部分即ち有情者の結合を對象とするのみ。」⁽²¹⁾と社会学の研究対象を限定的にとらえていることと関連づけて、社会の本質がとらえられていることを示している。「…（略）…社會の本質を以て望まれたる共存なりと斷じ、かゝるが故に共存の欲求に反せる『反對』或は『争闘』の現象は社會學の對象外であり、望まれたる共存にして心的相互作用なきあり、心的相互作用ありとするも其間猶共存の欲求なきこともあり、且つ相互作用には間斷あれども社會は間斷なく存続するものなるが故に心的相互作用を以て社會の本質であるとする軌近社會學界の主潮に對して論難頗る努め…（略）…」⁽²²⁾と高田博士の社会学説の最も中心となる点をとらえて示している。さらに以下順を追ってこの著書に示された高田博士の学説をまとめて示した上で、銅直教授は次のような問題提起をしている。

第1は、「…（略）…著者が科學的立脚地に立って飽迄もこれを嚴守せんとする態度の明確裁然たるを喜ぶものである。…（略）…然しながら全篇を通覧するに猶この立脚地の徹底に多少の遺憾がありはしまいか。」⁽²³⁾という点である。その1例として、普遍的な社会變動の過程についての法則を求めるのであれば、時や所を異にする社会形態の分類、関係の研究をもって社会学の中心課題とするのは当を得ておらず、あらゆる社会形態に同様に行われる普遍的法則を求めることが社会学の主要問題となると考えられないだろうかと問題提起している。また別

の例として、社会進化論を駆逐することの必要を説きながら、見方によっては社会成立論、社会結果論の少なからぬ部分が社会進化論的性質を帯びているのではないかと指摘する（ここで、社会進化論を除いた社会学を「純正社會学」として、社会進化論をこれから除くことに賛同するとしながらも、「社會學 即 純正社會学」といえないと指摘していることは、前稿での考察内容と関連して、銅直教授の社会学と純正社会学の概念、両者の関係についての考え方を理解する上で重要な示唆となることを付言しておきたい）。高田博士が社会諸形態間の継起的関係を説いて一切の社会に共通する發達の傾向があることを断言し、また生物進化の法則の可能性を認めている以上、同様に社会進化論の可能性を認めることができないであろうかと問題提起している⁽²⁴⁾。

第2は、「又著者は結合現象を社會現象の一種であると見、従って結合の科學である社會學の手より爾餘社會科學に對する君臨の王冠を奪ひ去ったのは洵に社會學史上に於けるフランス革命ともいふべきであるが、然し著者の所謂歴史的社會的實在とは如何なるものであらうか…（略）…」⁽²⁵⁾という社会的實在、即ち社会の本質としての「共存」に関する点である。社会の本質を共存と考える高田博士の「共存説」に対して、次のような二つの例をあげてどのように考えるべきかを問うている。その第1の例は、菊池寛の『恩讐の彼方へ』を例として、仇を討つことを少しでも早く実現するために協働する場合、二人の心には宿怨が燃え、共存の欲求が毫もなくても、二人はなお社会をなしているのではないかという問題提起である。その第2の例は、家族の成員が四散して何らの相互作用がないとすれば、これは社会学の考察の対象外ではないのか、もし相互作用の断絶ではなく断続であるとするならば、これも相互作用と見て良

いのではないかという問題提起である⁽²⁶⁾。

第3に、これに続ける形で銅直教授は、高田博士は反対、争闘、分離は結合ではなく、それ故これらを社会の本質の中に含む可能性を持つ心的相互作用説は採るべきではないと説くが、高田博士自身がこの著書の中で反対も欲望の平行に起因していること、それ自体一つの社会現象と見られること、これらの現象も社会学的に重大な意義があると認め、社会学的説明の重要な一部をなしているとしていることを指摘し、それらの点から考えても「…(略)…これを社会学の対象とする方が『便宜上』に於ても適当なりと見られないであらうか。」⁽²⁷⁾という問題提起をしている。

この後に、「文化価値と社会結合の概念との関係、及文化一般の概念に就いても少し教示を受けたいと思はれた。」と記しているが、銅直教授の問題提起は上述の3点が中心であると理解される。これに対して高田博士がどのように検討を加え、自説の再説明、反論を展開したかを次に見なければならない。

(4) 高田保馬博士の再説

—『社会関係の研究』から—

1)『社会関係の研究』第2章の構成と基本的視点

高田博士の『社会関係の研究』は、「前篇 社会の概念…第一章 社会の本質について／第二章 社会の本質に關して(銅直學士に答ふ)／第三章 社会学の性質／後篇 社会関係の研究…第四章 結合の上位／第五章 定型としての共同社会／第六章 社会関係の研究／第七章 階級の自壊作用／第八章 結合と分離との関係」の構成を持つ、498頁に及ぶ著書である。この著書の基本的な立場について、高田博士自身は「…(略)…最近の獨逸社会学、ことに形式社会学乃至関係論の影響の下に成立したるも

のではあるが、何れの問題についても私見を提示せむと力めたつもりである。」⁽²⁸⁾と示している。この著書は今日においても、『社会学概論』や『社会関係の研究』は、彼の社会学上の代表作である。⁽²⁹⁾と位置づけられており、その内容については「若くして大著『社会学原理』(1919)を著し、そこにおいてすでにギディングスやジンメルの影響のもとに、総合社会学の立場を批判し、特殊科学としての社会学の立場を示した。この立場をさらに『社会学概論』(1922)や『社会関係の研究』(1926)において洗練化…(略)…」したものととらえられている⁽³⁰⁾。ここに示された『社会学原理』から『社会関係の研究』にいたる間の高田博士の研究の進展、洗練化に、以下に示すような論争の経過を知るならば、銅直教授の問題提起とそれへの回答を考えることも関係していると考えられるのである。

この『社会関係の研究』において、高田博士は上述の構成に見られるように第二章を「社会の本質に關して—銅直學士に答ふ—」と題して、(3)で示した銅直教授の問題提起に対する回答、自説の再説、さらなる展開にあてている。高田博士は第二章の冒頭に次に示すような「前文」を付し、銅直教授の指摘に対して回答を展開するうえでの基本的な態度と、ここで展開する議論の主題に関する限定を示している。

銅直勇學士は哲學研究第六十九號(大正十年十二月號)に於て、拙著社会学原理につき詳細なる紹介を試み且つ懇篤なる批評を與へられた。此批評は數多の事項を含み、到底茲に一々答辯をなし得べくもない。其中の或點に關しては私自身之を承服すべき必要を認め、後の著述社会学概論に於て變改を加へてゐる。今はただ社会の本質に關する批評に就いて、私見を述べ重ねて其教を仰ぎたいと思ふ。同

學士の批評に接して既に二年、身邊の事情の為に心ならずも今まで答辯の禮を缺きたる事を詫びると共に、其厚意に對して感謝の念を捧げる。同學士自らの社會本質に關する高見に就いては、別の機會をまちて論及する事とし、茲には問題を私見の批評のみに限局する⁽³¹⁾。

こうした「前文」を持つ第2章は次の8節からなっている。

- 第一節 共存説
- 第二節 銅直學士の批評
- 第三節 共存欲求の一面性
- 第四節 結合と分離 對 社會と反對
- 第五節 征服國家について
- 第六節 相互作用と社會
- 第七節 相互作用の斷續と云ふこと
- 第八節 心的相互作用説に就いて再び

高田博士は第一節において、自らの社會の本質についての考え方を再び要約して示しているが、その最も基本になるのは「社會の本質は望まれたる共同生存にある。」⁽³²⁾ という措定である。その上で「此共同生存即ち共存は相手に對する愛着そのものの爲に（云はば人そのものの爲に）要求せらるる事もあり、又は何等かの目的の爲に（廣義に於ける利益の爲に）要求せらるる事もある。何れにせよ、此要求を充しつつ共存の營まれる時、後者は單なる傍存から轉じて社會となる。」⁽³³⁾ と社會の本質を説明している。その上でこの考え方は、1. 社會の本質を心理的な過程ではなく、一定の状態の中に求める、2. 心的相互作用説の意味する社會の本質はあまりにも広範であり、反對・争闘は心的相互作用に属するが、これを社會の範圍から除外して、結合のみを社會と見る（心的相互作用は

社会的なるものの本質をなすが、社会的なるものと社會そのものは分けて考えることが必要である）、3. 人そのものの結合、人と人の直接的な關係に第一次的な重みをおく⁽³⁴⁾、という特徴を持つと説明している。さらに、社會の本質を求める着眼点、具体的な考察の素材は人によって異なり、それによって社會の本質の見方も影響を受けるが、高田博士自身は家族、恋愛の中に社會の深さ、強さを見て、こうした深いもの、強いものに着眼して社會の本質を考察する立場を取る⁽³⁵⁾ としている。

このように自らの考え方を明らかにした上で、高田博士は銅直教授の問題提起のなかから、1. 共存説に關しては、『恩讐の彼方へ』を例として、協働の事實はあっても共存の欲求、望まれた共存がなければ、高田博士の説によれば社會の存立を否定しなければならないのではないかと、2. 相互作用説に關しては、家族が四散して何らの相互作用もなければ社會の存立を否定すべきであり、もし相互作用が完全に断絶しておらず、断続して行われていれば相互作用が存立していると見るべきであり、それは「相互作用説」に立つとしても社會は存続しているといわなければならないのではないかと、の2点を重点的に取り上げている⁽³⁶⁾。そしてこの2点について第三節から第五節、第六節から第七節で回答と自らの考え方についての再説、説明のさらなる展開を行ない、その上で第八節においてまとめをかねて、ふたたび心的相互作用説に對する自らの考えを集約的に示している。以下、その各々について見ていきたい。

2) 社會の本質としての「望まれたる共同生存」

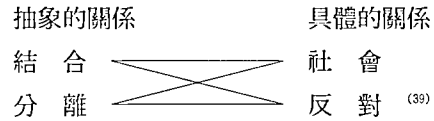
第1点について、高田博士は『恩讐の彼方へ』に示された例は銅直教授によれば協働はあっても、一方は宿怨の念に燃え共存の欲求がまったくないとされるが、人々の間の結合・分離は複

難な成分からなり、単純に結合または分離のみであるというのは概念的にはありえても、現実には一面においては結合であっても他の一面においては分離であったり、生活内容が豊富なほど結合と分離の組み合わせがきわめて複雑なものになると指摘する。それ故、この例においても二人の心が宿怨に燃えているとしても、なおその間に結合の要素は存立しうるとして、次のように説明を加えている。1. いかにも仇敵の関係にあっても、ともに人として相対するところ、その間にはある程度の結合が存立せざるをえない。また、同一の時代、同一の文化により育まれ、同一の階級、同一の生活状況に置かれているという類似が何らかの親和をもたらすと考えられる。もし、この点を否定したとしても、2. この例の場合、両者は洞門工事の成就という共通の目的のために努力している。この点において相手の生活方面の存続を希望していると考えられる⁽³⁷⁾。

このように説明した上で、高田博士は「例示の場合に於て社会ありとは私と雖も之を認める。彼等の間には明に共存の欲求あり、此欲求によりて共同の生存が求められてゐるが故に。仇敵関係が他の方面に於て存立するとも此欲求の存立は決して拒否せらるる事はない。」⁽³⁸⁾と結論づけている。

その上で第四節でさらに説明を加えて、結合も分離も生活の種々の方面について成立するものであり、生活のある特定の方面において成立する関係は「抽象的關係」であり、全体的関係はより複雑な性質を帯びているが、これを「具體的關係」ととらえるとする。そして、生活の一方面における結合、または分離を単に「結合」「分離」と名づけ、この「結合」をその背後にある他の方面の結合や分離と考え合わせ、具体的な姿として認められた場合にこれを「社会」と名づける。同様に一方面における「分離」を

他の方面における結合や分離と考え合わせ、具体的な姿として認められた場合に「反対」と名づけるとして、その関係を次のように図示している。



その上で、「これは畢竟特定の相手の間に存する結合と分離との強弱によりて、其具體的關係が社会であるか又は反対であるかとなすのである。」とし、二者の間に結合と分離の抽象的關係は多数存在しうが、具體的關係は社会か反対かのいずれか一つのみが存在すると結論づけている⁽⁴⁰⁾。

第五節では、共存説が全ての社会を十分に説明しつくすものではないこと、特に「征服国家」のように強制的な結合による社会の場合、その社会としての成立根拠について説明することが困難であることを自ら明らかにしている⁽⁴¹⁾。

3) 銅直勇教授の問題提起に対する自説の提示

高田博士は「心的相互作用説」を採らない理由として、1. 争闘も相互作用であり、相互作用の範囲は結社の範囲よりも広い、2. 相互作用は断続的なものであって連続的なものではなく、連続的存在である社会の本質とはなりえない、3. 相互作用がなくても社会の存立が認められる場合がある、の3点をあげ、銅直教授の問題提起は第2、第3の論点に関するものであるとする⁽⁴²⁾。その上で、家族が四散した例について、高田博士は相互作用がなくても社会は存続するとしたのに対して、銅直教授は相互作用がなければ社会が存在しないと批評を加えたとして、この点について二段階に分けて回答、自説の再説、展開を行なっている。

第1の論点は「相互作用なしとすれば、今の場合、社会果して存立せざるか。」という点で

ある。この点について、高田博士は相互作用がなくても社会は存在するとして、その一例として、相互作用がなければ社会が存在しないとすれば、深夜全ての人々が眠っている場合には国家も教会も会社も存在しないといわざるをえないという例をあげている。四散した家族の場合も、彼等が再び出会う時には見知らぬ人々が出会ったのとは異なるのであり、相互作用がなくても何ものかが存在する、それが「結合」にはかならないとする。その上で A. Vierkant (1867~1953) の説を引用しつつ、相互作用が社会の本質ではなく、「内的結合」が社会の本質であり、四散した家族の成員の間にもこの内的結合は存続していると説明している⁽⁴³⁾。

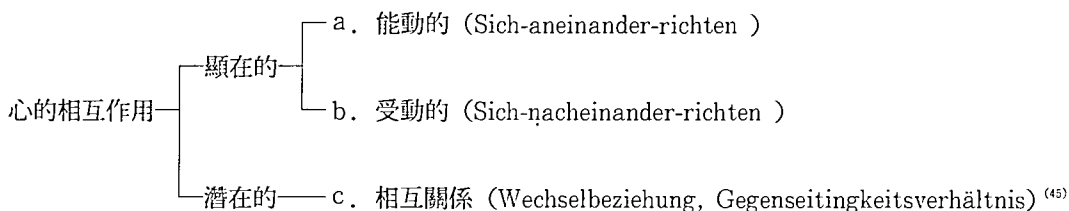
第2の論点は「相互作用なしとすればと云ふ假定は如何なる意味に解せらるべきか。」という点であり、高田博士は相互作用がなくても社会は存在するという考え方に立つことを既に示しているが、これと関連してここでもさらに「相互作用の内容又は意義」について分析し、説明している。

ここで第1に取りあげられるのは、社会の本質を心的相互作用に求める「心的相互作用」説である。社会の本質に関する相互作用説は、この相互作用を心的なものとしているが、もし「心的相互作用」を社会の本質と考えるならば、これに取り入れることができると考えられる「可能的意義」は下に示す3点に限られると考えられるとしている⁽⁴⁴⁾。

そして、家族が四散した例については、1. 能動的相互作用—相互に相手の意識の上に何ら

かの作用を及ぼそうとして相手に活動を加える—は認められないが、2. 受動的相互作用—受動的に相手の心的内容に応じて自己の心的内容を定める—は絶滅するとは想定し難く、「内的相倚」は認められ、さらに3. 相互関係—相互関係は相互作用の生まれ出るべき潜在的な姿—は存在しているとする。それゆえ、四散した家族においても社会は存続していると説明する⁽⁴⁵⁾。

続いて第七節では、銅直教授の「…(略)…相互作用が全く断絶し終るに非ず、それが断続するならば、やはり相互作用あるものと見らるるではないかと。」という問題提起に対して、相互作用と相互関係はその概念内容において全く異なった事柄であり、相互作用の断続はたいていの場合相互関係の存続を意味するとしても、相互作用の存続を意味するものではない、と説明する⁽⁴⁶⁾。その上で第八節において、1. 心的相互作用の範囲は社会の範囲をこえ、反対・争闘の場合にも心的相互作用は行われる、2. 心的相互作用は断続性を持ち、社会の連続的存立を説明できない、さらに、3. 社会は精神的な事象であり、文化の世界に属するが、心的相互作用という意味を離れた概念、心的過程の総合を示すにとどまるものはこの精神的なものを表わすには不十分である⁽⁴⁷⁾、と説明している。さらに、高田博士自身がかつては「社会」と「社会的なるもの」の本質を分けて、心的相互作用は社会的なるものの本質、社会的な事象を社会的ならしめるものであっても、社会の本質ではないとしたが、ここではさらに考察を進めて、心的相互作用そのものを無条件に社会的と



いうことはできず、社会的なものの特徴は「結合」を伴う点にあるとしている。高田博士自身、この時点では「今の私の態度としては云ふ、心的相互作用は社会の本質に非ず、又社会現象の特徴にも非ずと。」⁽⁴⁹⁾と結論づけるまでにいたっていることを明記している。

以上に示したように、高田博士は銅直教授の問題提起に対して第二章の1章、全8節すべてを費やして回答を示し、自説を改めて再説、展開しているのである。

(5) 銅直勇教授の社会・社会現象の本質に関する学説

1) 「社会の概念」論文における社会・社会現象の概念

銅直教授が高田博士の『社会学原理』に対する書評を公表(1921年)してから、高田博士が『社会関係の研究』を刊行(1926年)する間、1922(大正11)年11月に銅直教授は『哲学研究』第80号に「社会の概念」論文を発表し、自らの社会の概念、社会の本質に関する考え方を明らかにしている。

銅直教授は論文の冒頭において「社会とは何であるか、即ち社会の本質的特徴を發見して社会の概念を決定しようとするのが本論文の目的である。」という、この論文の目的と、そのために H. Spencer (1820~1903) を初めとし、それ以後の主な社会学者の社会概念を検討し、その上で自らの社会概念を示すという考察の手順、構成を採ることを示している⁽⁵⁰⁾。

銅直教授は H. Spencer の考え方については、「…(略)…スベンサーの社会の本質又は性質に就いて最も吾人の注意すべき點は、彼が社会を a whole, Concreate unity, と考へたこと及び彼が社会を静的には permanent relations, 動的には Co-ordinated action 又は Co-operation と考へた點である。」⁽⁵¹⁾ととらえて

いる。その上で、R. Worms (1869~1926)、Fairbanks (詳細不詳)らの考え方について検討を加え、これらの人々が社会の本質的特徴とする協働、行動の統整、適応、永存的關係などは、有心物の心的相互作用によって行われるのでなければ決して社会となることはできないと結論づけている⁽⁵²⁾。

次に、心的相互作用があるところのものを社会であるといえるかについて、そうした考え方を取る、A. W. Small (1854~1926)、G. Simmel (1858~1918)、J. H. W. Stuckenberg (1835~1903) の考え方を素材として検討している。G. Simmel を例とすれば、最も明快に多数の個人が相互作用をなしているところに社会があるといっているととらえ、それに対してこの考え方によれば「戦争」のような現象も社会ということになるが、戦争のような現象を果たして社会ということができるのかという問題が生じるという疑問を提起する。この問題提起に対して銅直教授は「蓋し、社会と、社会現象又は『社会的』といふことゝは最も嚴密に區別しなければならぬ。」とした上で、「心的相互作用は社会現象又は『社会的』なものゝ本質ではあるが、然し社会と社会現象とを同一視してこれを以て社会そのものゝ本質とすることは出来ない。」⁽⁵³⁾と、「社会」と「社会現象」あるいは「社会的なもの」を區別してとらえようとする自らの考え方を明らかにしている。さらに心的相互作用説に関連して、J. G. Tarde (1843~1904)、É. Durkheim (1858~1917) の考え方を検討している。J. G. Tarde のいう「模倣」に関しては、互いに模倣することは心的相互作用そのものであり、「純粹に社会的」なものの最も機微な点を指摘したものとなりえても、これをもって「社会」の本質とする J. G. Tarde の考え方には賛成できないとしている⁽⁵⁴⁾。また、É. Durkheim については、社会を社会現象を

作り出す地盤あるいは原因と考え、社会の本質として心と心の間に交換される諸関係、あるいはまた協働を重視していると推測されるとしている⁽⁵⁵⁾。

ここで小括と問題提起をかねて示されている銅直教授の考え方は、次のようなものである。「以上述べたる如く、心的相互関係は社会の成立上缺くべからざる第一の条件であるが、然し心的相互関係ある處輒ちそこに社会ありといふことは出来ないといふことを述べた。然らば心的相互関係の如何なるものが即ち社会の本質であるか。」⁽⁵⁶⁾

これを受けて C. A. Ellwood (1873~1946)、K. Davis (1908~不詳) の考え方を検討しているが、C. A. Ellwood の考え方については、心的相互作用によってなされる協働、統整、相互適応を社会の本質としており、これは社会の真相に近づいてはいるが、決定的本質概念とはできないとしている。また、K. Davis の考え方については、C. A. Ellwood と同様に、相互関係の下に行われる協働、統整、あるいは適応をもって社会過程、社会の本質と見ているとして、さらに考察を進めている。そこでは F. H. Giddings (1855~1931) の「…(略)…社会とは即ち意識的生類の自然的に發達しつゝある團結であつて、その中に於いて親和は一定の關係となり時と共にその關係は複雑なる永存的體制となる如きものをいふのである…(略)…」⁽⁵⁷⁾ という考え方を援用して、銅直教授自身の社会の第1の定義として、「…(略)…『社会とは相親和し又は相協働する有心物の團結である』といはうと思ふ。」⁽⁵⁸⁾ と示している。

その上で「統整」の概念について考察を加え、統整とは部分が全体に統一された静的關係状態であるが、このような關係状態は社会の本質的特徴、社会特有の性質ではなく、逆に、社会が社会たる所以はその成員の間に心的相互作用

が働いているところにあるとする。それゆえ、相親和し、相協働して社会が成立するとき、その社会構成員間には何らかの統一の關係が存在するのであり、この統一を静的抽象的な關係状態として見たものが統整であると指摘している。こうした考え方にたつて、第2の定義として、「即ち社会とは統整せられたる個人の心的相互關係によつて成る團結である。」⁽⁵⁹⁾ を示している。

この二つの定義を受けて、「而して吾々は前に挙げたる第一の定義は社会の概念を實質的に最もよくいひ表したるものと考へるのであるが、然しその親和協働なる二概念を更に統合して一語よく社会の本質を明にし得る如きものはないであらうか。」と問題提起をし、それに答えて「吾人はこゝに於いてこの要求を満すべく共同の活動なる概念を以てしたいと思ふ。」⁽⁶⁰⁾ と示している。その上で「共同の活動」とは、複数の個人が共に共同共通の行動に關与していること、實質的にいえば親和協働にはかならないとし、親和協働が存在するところにこそ複数の人々が一体となり、その間に「一貫の生命の感通」があり、これこそが社会そのものであると結論づけている。

ここまでの考察を重ねた上で、この論文における最終的な結論として、銅直教授は「吾人は今茲に挙げたる⁽⁷⁷⁾ 旨趣によつて社会の概念を次の如くにいふことが出来る。即ち社会とは相與に共同の活動に關與し且つこれに關與せることを潜在的に又顯在的に意識せる有心物の團結であると。即ち以上の如く條件づけられたる『共同の活動』即ちこれ社会の本質的特徴であつて、これある處必ず只社会あり、社会ある處必ずその活動の行はるゝを見る。」⁽⁶¹⁾ と社会の概念、社会の本質を示している。

2) 『純正社會學概論』における社会・社会現象の概念

高田博士が『社會關係の研究』を刊行し銅直教授の書評に対する回答・反論を示した1926年の3年後、1929年に銅直教授は前稿で検討を加えた『純正社會學概論』を刊行した。

銅直教授はこの著書の巻末に「社會學參考書について」を付し、そこで「邦書」の冒頭に高田博士の著書を取りあげ「始めて社會學概論に關する邦書を何か一冊だけ讀んで見たいといふ方には、第一に 社會學概論 高田博士をお奨めする。勿論私共の立場とは違った點もありますが、社會學界最近の發達を取り入れ、一つのまとまった組織としたもので、最も適當と信ぜられる。」と高く評価し、合わせて『社會學原理』についても「次に社會學を尙より深く研究しようといふ興味を起された人には…(略)…」⁽⁶²⁾と推薦している。しかし、本文の中では多くの先行する社会学者の学説を検討しているが、そのほとんどは海外の社会学者であって、直接高田博士の考え方を取りあげて検討を加え、それに対する自らの考えを示している箇所は見あたらない。

先に前稿の2(2)に記したことと重複するが、『純正社會學概論』に示された銅直教授の社会の概念について、その要点を記すならば、次のようにとらえられる。この著書では銅直教授は基本的に「社会」と「社会現象」を区別する立場を取るが、社会現象までもを社会学の対象とする立場に立っている⁽⁶³⁾。銅直教授は「…(略)…社會即ち結合關係は社會關係の一種であって、社會現象なる觀念は社會なる概念よりも更により廣い外延を有する概念である。」⁽⁶⁴⁾として、社会の本質を結合關係に求めている。これに対して社会現象は「…(略)…心的相互作用又は相互作用…(略)…」を意味し、同時に又これより生ずる一切の現象を意味し、又一切

の現象が心的相互作用又は相互關係なる概念に關係して考察せらるゝ限りに於いて、それは社会現象といはれる。」⁽⁶⁵⁾ととらえている。即ち、社会の本質が結合關係－親和結合－ととらえられているのに対して、社会現象は、その本質である心的相互作用が親和結合とともに反対衝突の關係も全て包括するものととらえられている。ここに銅直教授の考える社会と社会現象の概念、各々の本質、両者の基本的な相違点が指摘されているのである。

なお、これも前稿でふれたところであるが、この著書を刊行した37年後に刊行された『社会学 上』(1966年)では社会の具体的概念は、「社会学の対象とする社会の概念は、要するにそれらの様々なる特殊の社会形態を含む一全体としての社会を意味する。社会は根本的に結合体であるが、然し現実には結合關係ばかりでなく、人と人との反対現象をも数多く含んでいる。」⁽⁶⁶⁾と説明されている。この説明を見る限りでは、社会の概念に変化が生じた点もあると推測されるが、この著書がテキストとして刊行されたこともあってか、この点についての銅直教授の考え方が十分に記述されているとはいえず、検討を加えるにはいたらないので、この文章を付記しておくにとどめたい。

3) 銅直勇教授の社会と社会の本質に関する説

以上における検討の結果明らかになった点を本稿における小括として、ここで示しておきたい。

銅直教授の社会、社会現象の概念とそれらの本質についての考え方は次のようにとらえられる。

銅直教授は基本的に社会と社会現象または社会的なものとを区別する立場に立ち、その上で、「社會とは相親和し又は相協働する有心物の團

結である」という第1の定義を示している。次に、社会の成員間に心的相互作用が働いていること、相親和し、相協働する社会構成員間に何らかの統一的関係が存在することを指摘し、そこから「社会とは統整せられたる個人の心的相互関係によって成る團結である」という第2の定義を示し、その上で、この第1、第2の定義を総合して、「社会とは相與に共同の活動に關與し且つこれに關與せることを潜在的に又顯在的に意識せる有心物の團結である」と最終的に定義し、「以上の如く條件づけられたる『共同の活動』こそ社会の本質的特徴であると結論づけている。このように、銅直教授は社会を「共同の活動に關與する有心物の團結」ととらえ、それゆえ「共同の活動」こそ社会の本質的特徴であるととらえている。他方、社会現象については、心的相互作用をその本質とするが、親和結合（團結）のみならず、反対衝突の関係をも含むととらえており、ここに社会と社会現象の違いを見出だしていたと理解される。

銅直教授がこのような考え方を示すのに先立って、高田博士は社会の本質を「有情者の結合」とする説明は不十分であり、社会の本質は「望まれたる共存」にあるという考え方を示していた。高田博士はこのような考え方に立って、1. 心的相互作用があっても、共同生存の欲求によるのでなければ社会が存在しているとはいえない、2. 社会の本質を相互作用とする考え方は反対も社会の一部分となり、結合との混同を生じやすい、3. 共存の欲求と共存の拒絶との反対する二傾向があっても、共存の欲求が打ち勝っている場合には社会の存在が認められる、4. この考え方によれば、個人間の活動を離れて社会の存在を認めることができ、心的相互作用が中断する場合にも社会が存在し続けると考えられる、といった諸点を指摘している。

銅直教授と高田博士は、1. 科学的社会学の

樹立を目指したこと、2. 社会と社会現象の概念を別のものとして区別してとらえようとした点では基本的にその考え方は共通する。しかし、その上で「望まれたる共存」を社会の本質と考える高田博士に対して、銅直教授は「共同の活動」を社会の本質と考えたのであり、ここに両者の考え方の相違点がある（菊池寛『恩讐の彼方へ』の例は、この相違点を如実に示す良い素材となったといえよう）。この点が両者の論争の一点となったのである。「共同の活動」というより具体的な要因を重視し、さらに「共存」から「團結」へと一步を進めた点に銅直教授の考え方の独自性が存在すると理解されるのである。

高田博士は銅直教授の問題提起に対して、共存の内容について、さらに結合と分離の概念を取り入れて検討を加えるとともに、心的相互作用に関してもその内容をさらに分類し、その継続・断絶についても検討を加えて、対応している。高田博士の対応に対する銅直教授のさらなる直接的な反応は現在のところ把握できていないが、自説の形成に対して高田博士の諸説は大きな示唆を与えたと考えられるのであり、その著書・論文の内容にも高田博士の考え方が反映している（＝単純な賛同、模倣、導入ではないことはいうまでもない）と考えられるのである。

（未完・以下次稿）

[注]

- （1）福武直「高田保馬」（福武直・日高六郎・高橋徹編『社会学辞典』1958年、所収）597頁
- （2）居安正「高田保馬」（森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』1993年、所収）959頁
- （3）稲上毅「高田保馬『社会学原理』」（見田宗介他編『社会学文献事典』1998年、所収）

400頁

- (4) 福武直 前出 (1958年) 597頁
- (5) 居安正 前出 (1993年) 959頁
- (6) 高田保馬『社会学概論』1922年、2頁
- (7) 銅直勇「新著紹介 社会学原理 高田保馬著」(『哲学研究』第69号、1921年、所収) 94～98頁
- (8) 高田保馬『社会関係の研究』1926年、40頁
- (9) 高田保馬『社会学原理』1919年、1頁
- (10) 同上 64頁
- (11) 同上 64頁
- (12) 同上 65頁
- (13) 同上 65頁
- (14) 同上 65～66頁
- (15) 同上 66～68頁
- (16) 同上 68～74頁
- (17) 同上 74～81頁
- (18) 同上 81～82頁
- なお、高田博士は自らの社会の本質に関する説を明らかにするために検討すべき他説を、1－1. 社会の本質として社会結合の状態に着眼する説、1－2. 社会の本質として社会結合を生じさせる心理的因子に着眼する説、2. 社会現象を社会的なものとする特徴に着眼する説、の3説に整理して示しているが、ここにも高田博士の当時の社会学説に対する認識の一端が示されていると考えられる。
- (19) 銅直勇 前出 (1921年) 94頁
- (20) 同上 94頁
- (21) 同上 94頁
- (22) 同上 95頁
- (23) 同上 97頁
- (24) 同上 97頁
- (25) 同上 97～98頁
- (26) 同上 98頁
- (27) 同上 98頁
- (28) 高田保馬 前出 (1926年) 2頁
- (29) 福武直 前出 (1958年) 597頁
- (30) 居安正 前出 (1993年) 959頁
- (31) 高田保馬 前出 (1926年) 36頁
- (32) 同上 36頁
- (33) 同上 36～37頁
- (34) 同上 37頁
- (35) 同上 38頁
- (36) 同上 39～40頁
- (37) 同上 41～42頁
- (38) 同上 42頁
- (39) 同上 43～44頁
- (40) 同上 45頁
- (41) 同上 48～51頁
- (42) 同上 52頁
- (43) 同上 52～53頁
- (44) 同上 53～55頁
- (45) 同上 55頁
- (46) 同上 56～57頁
- (47) 同上 58～59頁
- (48) 同上 60頁
- (49) 同上 61頁
- (50) 銅直勇「社会の概念」(『哲学研究』第80号、1922年、所収) 34頁
- (51) 同上 36～37頁
- (52) 同上 38頁
- (53) 同上 41～42頁
- (54) 同上 46頁
- (55) 同上 47頁
- (56) 同上 48頁
- (57) 同上 51～52頁
- (58) 同上 52頁
- (59) 同上 52頁
- (60) 同上 53頁
- (61) 同上 53～54頁
- (62) 銅直勇『純正社会学概論』1929年、1頁
- (63) 同上 55頁

(64) 同上 58頁

(65) 同上 58～59頁

(66) 銅直勇『社会学（上）』1966年、92頁

【付記】

1. 著者は大学院在学中に故 馬場明男博士の講義の中で、銅直教授と高田博士の間の論争やその文献について初めてお聞きした。本稿をまとめることができたのも、その出発点においては馬場博士のご教示の賜物である。この事情をここに記して、改めて馬場博士に感謝の意をあらわします。

2. 本稿の主要検討素材である、銅直勇「新著紹介 社会学原理 高田保馬著」（『哲学研究』第69号、1921年、所収）の入手に際して、明星大学日野校舎図書館松尾和彦氏の協力を得た。ここに記して、感謝の意をあらわします。
3. 前稿でも同様のお断りをしたように、本来ここで参考文献を明示すべきところであるが、本論考は3回の分載を予定しているので、その最終回の末尾にまとめて記載することとしたい。この点に関してご理解いただきたい。

（たかしま ひでき、本学科教授）